

術前訪問における写真小冊子の評価 — STAI(the State Trait Anxiety Inventory) を用いて—

The Evaluation of Illustrated Brochures in Preoperative Visit
— Using STAI(the State Trait Anxiety Inventory) —

今福 恵子・浦田 瑠奈・水野 綾子・纈纈 美保子

IMAFUKU Keiko and URATA Runa and MIZUNO Ayako and KOKETSU Mihoko

1. はじめに

手術は非日常的体験であり、何らかの脅威・不安が術前の患者に大きな影響をもたらす。そのため、術前訪問により患者の不安を軽減することは、手術室看護の目標の一つである。

静岡病院の手術室においては、4年前からほぼ全例の患者に対し術前訪問を実施している。また術前訪問で得た患者の情報から看護計画を立案し、患者が手術にむけて心身の安定が図れるように援助している。患者からは、術前に手術室看護師を話すことができよかったという言葉がしばしば聞かれている。しかし、現在の術前訪問の形式は、説明項目のマニュアルは作成してあるが、統一した冊子はない。また、スタッフ個々の判断により口頭で患者に説明をしている現状であるため、説明用の冊子を作成した。深澤によると「手術室は患者にとっては、病院の中でも隔絶された世界であり、手術の大小にかかわらず『手術室に入る』というだけで漠然とした不安が募るのは当然のことである」。¹そこで、患者が手術室という未知の環境におかれるという不安要素のひとつに着目し、手術室がどのようなものかイメージ化できるように冊子に写真を用いることを考えた。さらに、絵を用いた説明よりも写真を用いた説明の方が、環境適応能力の高い年齢に効果があるという研究や、前日に写真入り冊子を用いて説明したことで年齢、性別を問わず安心した人が多いという研究がなされているが、数少ない。またそれらは婦人科のみを対象とした研究であったり、手術前と手術後で不安度を比較したものであった。そのため本研究では、術前訪問に冊子（以後パンフレットとする）を用いた群・用いない群について、術前訪問前後の患者の不安度を状態・特性不安検査（State-Trait Anxiety Inventory、以後STAI 質問用紙とする）を用いて調査し、写真入り冊子を用いた術前訪問が患者の不安軽減に効果をもたらしているか検討した。

2. 研究目的

手術室看護師による術前訪問の効果を、媒体（写真入り冊子）使用時・未使用時に区別し、評価する。そして術前訪問時に、写真入り冊子を用いることで不安の増強はないか、また術前訪問が患

者の不安軽減に効果をもたらしているかを検討する。

3. 研究方法

1) 研究期間：2006年5月～2007年3月

2) 調査対象：

全身麻酔、及び硬膜外麻酔併用の予定手術・入院患者、成人（20歳以上）とした。

3) 調査方法

(1) 手術室写真入り冊子（以下、冊子とする）の作成

手術室入室から麻酔導入までの様子を、写真に言葉で説明を加えたオリジナルのもの。

(2) 調査方法

A群（対照群：写真をみない患者）：手術前日に従来と同様の術前訪問を実施する。

B群（実験群：写真をみた患者）：手術前日に冊子をみることに同意した患者に対し、冊子を使用し、術前訪問を実施する。

C群（写真をみたくない患者）：手術前日に冊子をみることに同意を得られなかった患者に対し従来と同様の術前訪問を実施する。

A群、B群、C群の患者とも、術前訪問実施前と訪問後の2時期に、STAI質問用紙によりさまざまな状況下で変動する「状態不安(S)」と、比較的変動しないパーソナル特性としての「特性不安(T)」を測定した。

STAI質問用紙は、1970年Spielbergerにより開発された不安度を測定するSTAI質問用紙を使用した。また本研究は1982年に中里・水口により作成された日本語版を使用した（中里・水口,1982）。なおこの日本語版の信頼性、妥当性は検証されている。「状態不安(S)」と、「特性不安(T)」それぞれ80点満点で点数が高いほど不安度が強いとされている。

さらに、日勤帯に術後訪問（術後3日目以後）時、アンケートを配布し当日または翌日に回収した。

4) 集計及び分析方法

SPSS ver.10を用いて単純集計と、A群、B群、C群の患者の術前訪問前後、及び男女差、年齢層におけるSTAIの得点の平均値の差異をt検定によって検討した。

5) 倫理的配慮

冊子を見ること、STAI質問用紙及び術後アンケートに答えることは自由選択であること、術前・術中の看護には影響はないこと、また、研究の主旨・個人を特定する情報は使用しないことを、患者自身に説明し研究への同意（同意書作成）・協力を得た。

3. 結果

1) 写真入り冊子の作成

手術室入室から麻酔導入までの様子の一部



術後アンケート(手術後3日後以降)

手術についてのアンケート

()歳 男・女

1. 手術前に手術室の看護師の説明を聞いて不安は楽になりましたか
ア. 楽になった イ. 変わらない ウ. 不安になった
2. 手術前の看護師の訪問は必要だったと思いますか
ア. はい イ. いいえ
3. 手術室看護師の訪問について何かご意見があればお聞かせ下さい
()

*パンフレットをご覧になった方に伺います

- ①パンフレットは見てよかったですか
ア. はい イ. いいえ
- ②手術室への入り方の写真は参考になりましたか
ア. はい イ. いいえ
- ③パンフレットについて意見をお聞かせ下さい
()

*パンフレットをご覧にならなかった方に伺います

- ・ご覧になりたくなかった理由を教えてください
()

入院中で大変な中、御協力ありがとうございました
手術室 看護師一同

2) 集計対象の属性等の分布

患者 176 名に調査依頼し、調査協力者は 160 名であった。統計解析には回収調査票 160 票のうち調査項目に欠損値を有さない 144 名を分析対象者とした。

【対象者の分類】

＜A群＞ 写真入り冊子をみない患者

従来と同様の術前訪問を実施・・・61名

＜B群＞ 写真入り冊子をみた患者

冊子を使用し術前訪問を実施・・・60名

＜C群＞ 写真入り冊子をみたくない患者

冊子をみることを選択しなかった患者に対し、従来と同様の術前訪問を実施・・・23名

従来の方法で術前訪問した A 群（対象群）と、冊子を用いた B 群（実験群）の不安得点を比べたところ、A 群の方が状態不安得点、特性不安得点が共に有意に高かった。

訪問前後では A 群、B 群共に有意な得点差はなかったが、B 群ではわずかに、訪問後の方が状態不安得点が下がった。

また今回、B 群の調査をしていくにあたり、研究の趣旨には同意したが、写真入り冊子をみることを拒否した患者が 23 人いた。これらの患者を C 群として、従来と同様の術前訪問を実施し、比較したところ次のような結果が出た。

表 1 回答者の性別

性別	人数	割合
男性	87	60.4
女性	57	39.6
合計	144	100

表 2 年齢区分

年齢区分	人数	割合
青年期 (20歳～29歳)	9	6.3
壮年期 (30歳～64歳)	67	46.5
老年期 (65歳～)	68	47.2
合計	144	100

表 3 状態不安得点と特性不安得点（性別）

	性別	人数	割合	STAI 平均値	標準 偏差
状態 不安	男性	87	60.4	41.36	9.87
	女性	57	39.6	45.87	10.95
特性 不安	男性	87	60.4	39.65	9.65
	女性	57	39.6	41.58	10.52

2) 写真入り冊子の使用の有無による比較

表4 様々な状態不安得点 (S-STAI) との関連 **p<0.05 ***p<0.01

要因	訪問	N	平均値	標準偏差	t 値	
1. 写真入り冊子を見た群 (B群)	前	60	40.5	9.41	0.347	
見た群 (B群)	後	60	39.9	9.54		
2. 写真入り冊子を見ない群 (A群)	前	61	44.2	10.86	-0.55	
見ない群 (A群)	後	61	45.31	11.5		
3. 写真入り冊子を見たくない群 (C群)	前	23	46.48	7.12	-0.045	
見たくない群 (C群)	後	23	46.61	11.95		
4. 写真入り冊子を見た群 (B群)	前	60	39.9	9.54	2.815	***
見ない群 (A群)	前	61	45.31	11.5		
5. 写真入り冊子を見た群 (B群)	前	60	40.5	9.41	-2.756	***
見たくない群 (C群)	前	23	46.48	7.12		
6. 写真入り冊子を見ない群 (A群)	前	61	44.2	10.86	-0.933	
見たくない群 (C群)	前	23	46.48	7.12		
7. 写真入り冊子を見た群 (B群)	後	60	39.9	9.54	2	**
見ない群 (A群)	後	61	45.31	11.5		
8. 写真入り冊子を見た群 (B群)	後	60	39.9	9.54	-2.668	***
見たくない群 (C群)	後	23	46.61	11.95		
9. 写真入り冊子を見ない群 (A群)	後	61	45.31	11.5	-0.933	
見たくない群 (C群)	後	23	46.61	11.95		

表5 写真入り冊子の使用と特性不安得点 (T-STAI) との関連 **p<0.05 ***p<0.01

要因	訪問	N	平均値	標準偏差	t 値	
1. 写真入り冊子を見た群 (B群)	前	60	36.52	8.51	2.865	***
見ない群 (A群)	前	61	41.46	10.36		
2. 写真入り冊子を見た群 (B群)	前	60	36.52	8.51	-3.022	***
見たくない群 (C群)	前	23	43.3	10.7		
3. 写真入り冊子を見ない群 (A群)	前	61	41.46	10.36	0.819	
見たくない群 (C群)	前	23	43.3	10.7		

写真入り冊子をみることを拒否したC群は、B群に比べ状態不安得点、特性不安得点が共に有意に高かった。訪問前後では有意な得点差はなかった。

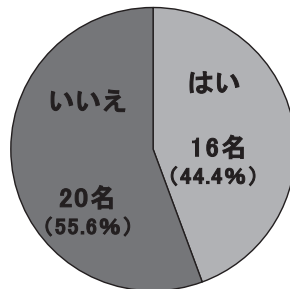
3) 術後アンケートの回答結果

術後アンケート結果

Q1. 手術前に手術室の看護師の説明を聞いて不安は楽になりましたか？

	A群 (みない)	B群 (みた)	C群 (みたくない)
楽になった	27名 (75%)	35名 (74.5%)	14名 (82.4%)
変わらない	8名 (22.2%)	11名 (23.4%)	3名 (17.6%)
不安になった	1名 (2.8%)	1名 (2.1%)	0
合計	36名	47名	17名

Q2. (A群対象)もし、手術室の中の様子がわかる写真があったら、手術前にみてみたいと思いますか？



Q3. (B群対象)写真入り冊子は必要だと思いますか？

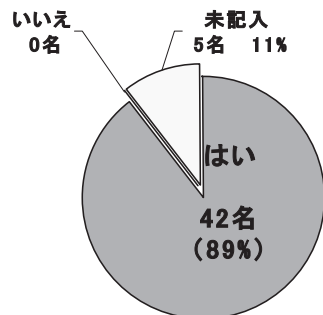


図6

4. 考察

B 群の術前訪問前後では有意差はなかったが、状態不安得点は訪問後の方が低く、術前訪問のアンケート回答者 47 名中のうち 35 名 (74.5%) が、「不安が楽になった」と回答した。また自由記述では「写真があつてわかりやすかった」「行ったことのない所の雰囲気を知ることができてよかった」「これから自分がどういう状態になって手術を迎えるか頭の中で整理できた」など、冊子に対し肯定的な意見が多かった。B 群の患者は冊子をみることに同意した患者であり、術前訪問の時点で冊子を必要とし、自らみることを選択した患者といえる。今回の研究で B 群の患者にとって冊子は、情報を得る有効な手段であり、不安軽減に効果があったと推測される。

C 群は術前訪問前後とも、B 群に比べ状態不安得点、特性不安得点が共に有意に高かった。特性不安得点は、その人の不安になりやすさを示すことから、C 群は不安になりやすい患者であり冊子をみることに抵抗を感じたと推測される。術後アンケートからも、「気が小さいから手術室内のことを知るのが怖かった」「怖さが一段と増すからみたくなかった」「見ない方が色々考えないで良いと思った」など冊子をみないことで自らの不安を増強しないように対処していると推測される。

A 群は術前訪問前後とも、B 群に比べ状態不安得点、特性不安得点が共に有意に高かった。A 群の術後アンケートでは、「手術室の中の様子がわかる写真があつたらみてみたいと思いますか」の問いに対し、「みたくない」と答えた患者が 24 人中 12 人いた。そのことから、A 群には C 群と同様に冊子をみたくない患者が含まれているため、不安得点が高かったと推測される。

男女差では、女性の状態不安得点 45.87 ± 10.95 は、男性 41.36 ± 9.87 と比較し有意に高く (表 1 参照)、手術患者の不安度調査の結果で女性が男性に比べ不安度が高いという先行研究の結果と同様であった。

荒木らは、患者は情報量の多さに圧倒されたり、困惑したりする。さらにそのことが不安の増強に繋がることを念頭におき、有効な手段で情報を提供していくことが重要である (荒木他, 2001) と述べている。本研究では患者に必要と思われる方法として、写真入り冊子を用いたが、この方法は術前訪問の一手段として有効であると示唆された。しかし、冊子をみたくないと選択した人がいることや、従来どおりの術前訪問でも「知っている看護師の顔があつて安心できた」「きてくれて気持ちがりラックスできた」という自由回答や、「不安が楽になった」と答えた人が 21 名いた。

限は、否認のある患者に無理に情報を与えようと悪く言われているので、否認が役立っている場合には心理的介入はやり過ぎないように慎重に、保護的、支持的でなければならない (隅, 1993) と述べている。よって術前患者は、不安度や知りたい情報の内容が異なるため、写真入り冊子を用いることがすべての患者に有効であるとは限らない。対象者の個別性を考慮し、患者自身に冊子を用いるか、用いないかを選択してもらう方法が必要である。

さらに本研究において、写真入り冊子を作成したことで、スタッフからも「説明しやすくなった」「患者と話がしやすくなった」という声がきかれた。説明する側、される側が両方とも満足できる冊子の作成や活用方法の検討が今後の課題である。

5. 結論

- 1) 術前患者は、不安度や知りたい内容が異なる。
- 2) 写真入り冊子を用いることがすべての患者に有効であるとは限らない。
- 3) 対象者の個別性を考慮し、患者自身に冊子を用いるか、用いないかを選択してもらう方法が必要である。

6. 謝辞

本研究にあたり、ご協力して頂いた患者様、静岡市立静岡病院の手術室師長ならびにスタッフの皆様へ深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 中里克治, 水口公信 1982 新しい不安尺度 S T A I 日本版の作成: 心身医学, 22 卷 (2 号) 108-112.
- 2) 荒木千代子, 北原節代, 矢野悦子他 2001 選択方式を取り入れた術前訪問の効果—4 つのツールを活用して—; オペネーシング, 16 卷 (11 号), 41.
- 3) 隈寛二 1993 医療の人間学 2, 手術患者の心理, 講談社, 106.
- 4) 深澤佳代子 1995 術前訪問の効果—STAI を用いた評価—: オペネーシング, 10 卷 10 号, 970-973.
- 5) 杉浦恵子, 松本直美, 前直美他 1996 写真を用いた術前訪問の一考察—婦人科患者における不安の変化—: 手術医学, 17 卷 (2 号), 230-233.
- 6) 秋月圭子, 奥村弘次他 1996 VTR・パンフレットを利用した術前訪問の一考察: 手術医学, 17 卷 (2 号) 264-266.
- 7) 林由紀子, 辻石美智子, 田中頼子他 1999 手術室看護師の術前訪問に患者からの希望を取り入れた介入と評価: 第 30 回日本看護学会集録 (成人看護 I), 66-68.
- 8) 林由紀子, 舩田弘美 1998 術前における患者の不安への看護—手術分類別にみる患者の術前不安と情報提供による不安度の変化—看護実践の科学 (5) 29-33.
- 9) 守田稲子, 伊東志乃, 神田郁子, 牧野典子 2001 急性期実習に伴う看護学生の不安の実態調査 静岡県立大学短期大学部研究紀要第 15 号, 125-133

(2009 年 1 月 9 日 受理)